
藤林幸のモダンな除霊法

44

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤林幸のモダンな除霊法

【Nコード】

N5265S

【作者名】

44

【あらすじ】

雑誌編集者中山幸（？コウ）？は『現代のイタコのビジネス』の取材を任される。霊の類は嫌いな幸は嫌々ながら仕事へ向かい、そこでイタコの幸（？サチ）？と出会い、実際の除霊現場に引き摺られていく。半ば強引に連れて行かれた幸であったが、幸の仕事に触れる中で、魂の明暗を垣間見る奇妙な一日を体験をする事になる。魚は言いました、『僕らは太陽の光を浴びたくても水から出る事すら許されない』

深海魚は言いました、『僕らはその光を見ることすら許されない』

んだ』

鳥は言いました、『僕らはいつまで飛び続けられるの?』

ねえコウちゃん、《c?r?y? f?o?r? m?o?o?

n?》って知ってる?

幸と幸（１）（前書き）

ちよつと変な話を描いて行こうと思います。

執筆ペースは遅めですので、ご勘弁を。その代わり小出しに連載して行こうと思います。

時間がある時の暇つぶしでも構いませんので、読んでいただければ幸いです。

幸と幸（１）

8月！

日本って国は梅雨が明けると「待つてました！」と言わんばかりに熱気を帯びてくる。それが7月中終始右肩上がりを続け、8月にピークを迎えるという自然の掟的なあれがあるわけだ。

全くもってこの暑さは忌々しい限りであるが、夏というのはそれは素晴らしい季節でもあったりする。

海開き、プール開きだとか……。

花火大会だとか……。

夏休みに入った女子高生の薄くい私服だとか！

こういう夏の風物詩を現地に取材に行き、経費でかき氷でも食べながら自分も久しぶりの私服でオシャレに決めてみる……。

これこそ雑誌編集者の冥利に尽きるのではなかるうか？！！

それが……。

「それが何でこんな所に……」

体に汗で張り付くYシャツを身にまとい、ロールアップなど許されないスーツをはいた俺がやってきたのは都内某所にある雑居ビルの一 corner。そのビルの薄暗い階段を2階まで登った先にある正面のドアの前で俺は立ち竦んでいる。

飾り気も何もないドアには一言……。

『藤林相談事務所』

「明らかに怪しいんだよなあ」

溜息を一つ。全く自分の仕事運のなさには頭痛がしてならない。

先日、俺をデスクに呼び出した鬼畜のハゲ……じゃなくて編集長は俺にこんな事を言い出したのだった。

「おう中山！ お前って前々から『夏らしい仕事がしたい』とか言ってたよな？」

「はあ……まあ」

こんなテンションで仕事が降ってくる場合は大抵やっかいものを押しつけられる時。

そんなうちの会社の暗黙のルールがあるわけで、俺はこの時既に何の期待もしていなかった。むしろ先手を打って絶望してみた。

しかし……。

「つてわけでお前に夏らしい仕事を用意してみた！ やってくれるな？」

これには喜ばざるを得ないし、普通に驚いた。手に持っていた手帳を床に落としてしまったぐらいだ。

「うええ！？ マアジっすか！？ やります！ 絶対やります！」

それを聞いた編集長、じゃなかったハゲはニヤリと口元を歪ませた。

「そうか、行ってくれるか！ じゃあこれは資料だ！ 明日から早速取材にあたってくれ！」

整理の行き届いていないデスクにバサバサと資料を放り投げられ、俺は他の書類と混ざらないように慌ててそれらをかき集めた。

「うわぁ珍しく優しいじゃないですか！ 場所はどこですか？ 海ですか？ 渋谷ですか？」

「そんなの書類見ればわかんのだろ。せつかくなんだから自分の目で確かめたらどうだ？」

確かめたさ。

資料の題名にはこう書いてあった。

『霊能力者の現在流のビジネススタイル調査』

「……」

俺は無言でハゲを見た。

ハゲはグッドポーズを決め、有無を言わさない一言をくれた。

「霊能力！ 幽霊！ すなわち怪談！！ ……夏だろう？」

「あのハゲ…いつか殺す」

そう事務所のドアにボソツと吐き捨てる、勿論ドアに罪はない。

こんな所で躊躇っていても意味ないのはわかってるが、気分が進まない。どうにも霊能力者の類ってものの胡散臭さは苦手だ。怖いっていつてもいい。

はつきり言って霊の話は苦手な部類なのだ。不確かな恐怖というものが内心を掻き乱す感覚が堪えられない。

扉は中が見えないようにガラスが濁っていて、中を覗くことも出来ない。

「何故、中を隠す。余計に怪しいじゃねえかちくしょう」

まあよく考えれば、プライバシー的な意味でも中が見えないようにする事はおかしな事ではないが、霊能力という先入観が否応なしに全てを怪しいと脳に伝える。

何度目かわからない溜息をもう一度ついて、地図代わりに手に握っていた資料を見る。

『イタコ、本来は憑き物の類を相手にする事を生業とした霊能力者しかし、現在では需要も減り、霊能力者も新しいビジネスを強いられるようになった』

なんだかなあ。テレビとかに出るならまだしも、ビジネスとして成り立つのか？

いろんな憶測が脳内を飛び交い、歩みを鈍らせるが、まあいつまでも構えているわけにはいかない。あまり入り口前でウロウロしているわけにもいかないし、っていうかこれじゃこっちが怪しい人だ。「とりあえず……いくか。いくぞ、俺は」

独り言が確実に増えているのは気付かないフリでインターホンに手を伸ばす。

内装が占いの館とか儀式場みたいな感じだったらどうしよう？そこにいるだけで気が狂うかも知れない。

しかし、これ程不安を感じてもちゃんと責務を全うしようとするぐらいの責任感はある人になると身に付くらしい。俺の緊張にうち震えた指先は、しかし確実にドア横のインターホンを押す事に成功

した。

ピンポン…

ピンポン…

誰もいない廊下に不釣り合いな大きさのチャイム音が響く。雰囲気最悪。

だからすぐに中の人チャイムに出てくれた時は正直嬉しかった。

『はい、藤林相談事務所です』

思ったより普通の対応。しかもアナウンサーのようなハキハキとして聞き取りやすい声だ。受付を雇うぐらいには繁盛しているのか？ 日常の仕事の空気に安息を覚える。

「お忙しい所失礼いたします。私、先日取材の予約をさせていただきました土方出版の中山と申します」

仕事の空気になれば気が張るから霊なんて大丈夫な気分になれる。多少は。

『ああどうもー！ 中山さんですね？ お待ちしましたよー。どうぞ、鍵はかかってないので』

アナウンサーのような丁寧な対応が一転、思い切りフランクな口調になる。アポをとったのはあのハゲ編集長なわけだが、あのハゲ、一体俺をどういう風に紹介しやがった。

声の明るさのせいかな、フランクな口調でも特に嫌な感じはしないから良いが、社会人の対応としてこれはいかなものだろう？

ドアの取っ手に手をかける。

ついに入るのか……。

仕事モードに入っても、やはりいざ入るとなると緊張する。

とりあえず……この仕事のせいで祟られたりしませんよーにつ！

！！

俺は意を決してドアを開けた。

幸と幸（１）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

モチベーションにも繋がりますので、よろしかったら感想などをいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5265s/>

藤林幸のモダンな除霊法

2011年4月17日00時55分発行